



RIKKYO SECOND STAGE

Contents

- P1 学びの苦しみとは何か:RSSCの目標
 P2 2011年度・新しい出発と出会い
 P3 本科生の横顔 P4、5 ゼミナールの紹介
 P6 話題の授業 P7 修了生の近況
 P8 サポートセンター活動、フィールドワークetc

立教セカンドステージ大学(RSSC)は、立教大学が提供する生涯学習の場です。RSSCは、RIKKYO SECOND STAGE COLLEGEの略称です。



発行：立教大学 「立教セカンドステージ大学」

編集責任：笠原清志 編集長：田島教雄

発行日：2011年9月15日

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1



学びの苦しみとは何か:RSSCの目標

立教大学文学部教授
渡辺信二



人はなぜ学び続けるのか。なぜに「苦しむ」ことを自ら選ぶのか。しかも、50歳を過ぎて。

60の手習いという言い方がある。しかし、立教セカンドステージ大学は、決して「手習い」の場、楽しき老いの境遇、いわゆるカルチャーセ

ンター科目、を提供するのではない。そもそも、自らをセカンドステージとは定義しない。

この学びの場は、50歳以上を対象とし、各々のセカンドステージ模索のための機会提供を目標とする。しかもこの目標は、アカデミックであることによるのみ成立するとの確信に由って来たる。

アカデミックであるとは決して、何か高尚で偉ぶった態度ではなくて、「問い尽くす態度」である。答える尊大さではなくて、問う謙虚さを意味する。「想定外」を排除する知的な真摯さ、未知を未知と認識し探求する知的無知のことである。そして、「問い尽くす」ことが実は「問い続ける」ことだと知る。こうした知的人生態度とその学びとは、唯一、良質な大学のみが提供しうる社会的使命である。

従って、われわれ教員は単にある分野における先達にすぎない。実際、受講生は人生経験が深く広く、その視

点や指摘は的確であるし、注目に値する。学習意欲は、あらゆる知を飲み込もうとする。下世話な言い方をすれば、「あの授業、またレポート2000字だって。これで来週3本宿題ができた」と口先で愚痴りながら、実は嬉々としてレポートをこなす。彼ら／彼女らは、学びの苦しみが実は喜びであるとよく知っているのだ。おそろべし、セカンドステージ大学生！

設立して既に4年目。全カリ受講やゼミ担当教員を通じて、受講生が学部生や大学院生と交流する機会が徐々に増え、相互学習が始まっていると言えよう。これは、データや数字には出来ないが、立教大学全体に良い影響を与えると確信している。

修了後も専攻科に進み、更に一年間セカンドステージ大学で学ぼうとする人たちが多く、また、大学院に進学する人たちもいる。幾つかのサークル活動を通じて今なお学び続けつつ、社会的貢献を行う人たちも少なくない。ここが彼ら／彼女らの第二の母校なのである。それをどうサポートできるのか。自らの役割を不断に問い続けることも、生涯学習の一つのロールモデルと云われる立教セカンドステージ大学の役割であろう。

最後に、江戸時代の儒学者佐藤一斎の言葉を引く。「老いて学べば、則ち死すとも朽ちず」。これが始まりであるべし。
(立教セカンドステージ大学運営委員)

2011年度・新しい出発と出会い

2011年度の本科4期生(77名)、専攻科3期生(52名)の入学式は4月3日に予定されていましたが、3月11日に発生した東日本大震災の影響で中止となりました。それに代えて4月21日に蔦の絡まる立教大学諸聖徒礼拝堂(チャペル)において、八木正言チャプレンから昼の祈り「震災被害者・被災地に奉げる祈りの集い」に続いて入学のお祈りをいただき、「学び直し」と「再チャレンジ」を心に刻みました。

そして、5月19日には伝統ある第一食堂でウェルカムパーティーが吉岡知哉学長の歓迎のご挨拶、庄司洋子先生の乾杯のご発声で開催されました。授業開始後2週間でしたが既にゼミ中心の多くの親しい友人ができ、これからのキャンパスライフに大きな期待感を抱きました。歓迎の歌として「見上げてごらん夜の星を」を合唱し、初めての「校歌」を斉唱しました。7月12日には、納涼パーティーが開催されました。ゼミ紹介を交えながら、楽しいひとときを過ごしました。



乾杯



司会



受付

立教セカンドステージ大学の入学にあたって

● ホームページにあった「知への欲求、止まず」のフレーズに魅かれて入学しました。当初は不安がありました。62の手習いゆえ、講義のレベルについて行けるのか、レポートは過たずに作れるのか、訳が解らなくて最後部席で悶々としているのではないかと。しかしありがたいことにそんな後ろ向きの不安は見事に外れてくれ、逆にサンバの様なリズムに乗る感じで通学し、教室やゼミナールで愉快に過ごしております。講義は面白く深いです。リーマンショック発生の背後にあったアメリカの政治・経済の話、沖縄戦や昭和憲法成立の話、想定外の長寿や「男介」世代(!)の話、これらの内容の意味・意義は、実はこの年で聞くからこそ深く理解できる、真剣に受け止められる、と思います。(新藤勇)

● 入学に際し、「課題エッセイ」を丸三日かけて書いたが、気分は爽快であった。なぜなら単に自分史のようなものを書くというより、職歴の背景にある自身の「本当の姿」をストレートに書けたからである。大半は会社人生にかかる業務上の特筆と志望理由であるが、これに加え趣味・関心事について相当の量を割いた。書いているうちにこれは「現役時代の総括」ということに気がついた。だから充実した気分であった。週4日の学生生活は先生の講義もさることながら、大学図書館で読書に耽り、そのあと講義を拝聴するというリズムがいい。(船戸五郎)

● 還暦を迎え、これまでの人生とこれからの人生を考えた。これまで真面目にやってきたという自負はあるが、果たして社会の規範に縛られてはいなかったか? これからは自分らしくありたい...そう思っていた時、RSSCの新聞広告が目に入り、直感的に入学を決めた。夏休みを控えた今、3000字以上のレポートには頭を抱えているが、この年でもう一度学生もいいい選択だと思っている。しかし、まだ種を蒔いたに過ぎない。豊かな老後を見据え、RSSCを大いに活用したいと思っている。(高橋とし子)

● セカンドステージ大学の新聞記事に、ふと目が止まった昨年の晩秋。それをきっかけに今ここに身をおくこととなりました。桜の花びらもパイプオルガンの演奏も無かったけれど、夢と希望がはち切れんばかりの同級生? との学生生活が始まりました。会社人間時代と大きく違うところは、曜日単位でバッグに入れていくものが変わること。まさに翌日の時間割に合わせて、教科書や宿題の準備をしている小学生の様。幾つになっても、明日の仕度をするのは楽しいものです。人生の第三コーナーを、ツタに覆われたレンガ校舎に見られながら生き生きと過ごしていきたいと思います。(山本典生)

2011年度本科生の横顔

立教セカンドステージ大学（RSSC）の2011年度本科入学者（4期生）77名の仲間たちの横顔をご紹介します（6月末にアンケートを実施し、75名からの回答を得ました）。

プロフィール

① 性別・年齢

男性43%（32人）女性57%（42人）と女性が約6割を占めています。年齢別では、60歳～69歳までが7割を占め、50代も2割に達し、70歳以上の方が3名います。

② 職業

入学前の職業は、会社員・会社役員の40%（30名）を筆頭に、さまざまな分野で社会に貢献されてきた方が集まっています。

③ 通学状況

RSSCのみの生活は、52%（39名）、仕事に從事しながらの形態は48%（36名）です。また、RSSCの通学状況については、多い順に、週4日37人・週3日20人・週5日9人です。

④ 居住地

多い順に東京（33人）埼玉（19人）神奈川（11人）千葉（7人）と首都圏で90%を占めていますが、栃木・新潟・静岡という遠隔地から通学してくる方々もおり学ぶ喜びと情熱に驚かされます。

⑤ 通学時間

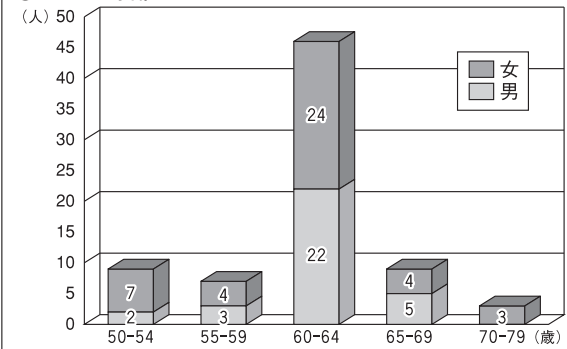
1時間以内の近距離の方が48%（35名）を占めていますが、逆に1.5時間以上の遠距離の方が17名おり、そのうち2時間以上という特に遠い方が5名います。

⑥ 入学のきっかけ

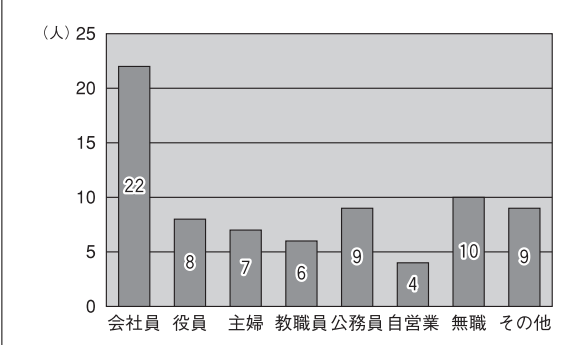
新聞記事を見た方が45%（33人）といちばん多く、次に、インターネットや知人の紹介・大学の広報・TV等の媒体が43%（32人）と続いています。

※上記①～⑥の未記入は数値に反映していません。

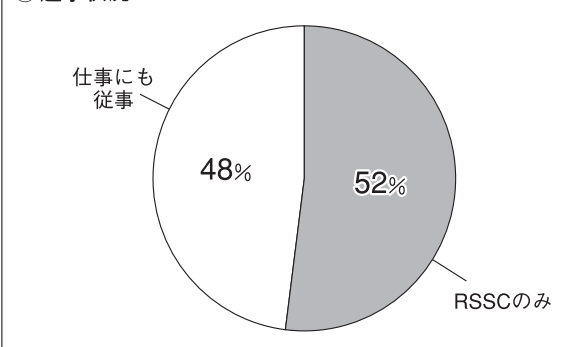
① 性別・年齢



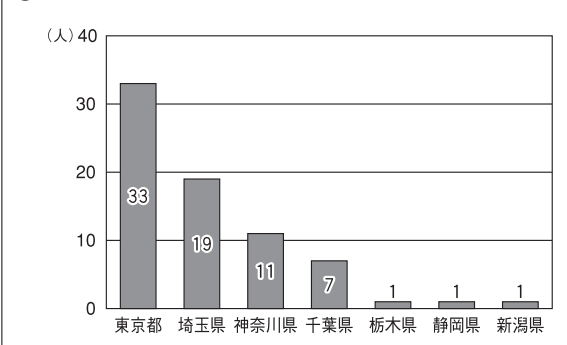
② 職業



③ 通学状況



④ 居住地



フリーコメント

本科生から多く寄せられたフリーコメントの代表例です。

◆ 入学の動機

学び直し、新しい友人との出会い、規則正しい生活を求めて入学された方が大半です。

◆ 入学してよかったこと

講義の内容がよかったこと、短期間でもゼミや委員会

活動を通じて職種の違う新しい人間関係が出来たこと、また、図書館を利用し、自ら学ぶ、生活のリズムができたことなどがあげられます。

◆ 入学して苦労していること

レポート作成や修了報告書作成時のパソコン操作に苦労されている方が多いようです。また、遠距離通学のため仕事と授業の両立に苦労されている方もいます。

ゼミナールの紹介



立教セカンドステージ大学に入学すると本科生・専攻科生は、授業の履修届と一緒にゼミナール希望届を提出します。

各ゼミは本科生・専攻科生合わせて15人前後で構成され、各々先生の指導のもとで行われるゼミと、ゼミ生が自主的に行うサブゼミが隔週で行われます。

ゼミのテーマに関して学ぶとともに、卒業時に提出する修了報告書(本科生)・修了論文(専攻科生)の研究テーマについて先生の指導をいただきながら、お互いに助言し、学びあうところは、他の社会人向け大学

やカルチャーセンターにはないセカンドステージ大学の特色です。

セカンドステージ大学では年間を通じ様々な行事が行われますが、こうした行事は各ゼミから選出された担当委員が中心となって企画・運営されます。

ゼミは木曜日の必修科目に続く6時限目(18:30~20:00)となり、ゼミ終了後は空腹も手伝ってか食事会へと繰り出すところも少なくありません。夏休み中の清里での合同ゼミ合宿、ゼミ単位での旅行など1年を通じてゼミ生は繋がりを深めていきます。

古賀 ゼミ

● 日本経済論・産業構造論

古賀ゼミは、本科生6名、専攻科生10名の大所帯です。ゼミのタイトルは、お堅いイメージですが、和気藹々とタイトルに縛られない研究をしています。たとえば、今年の統一地方選の検証、東北大震災での原発問題など、その時々の時流に合ったテーマを取り上げ、みんなで真剣に討議をする臨機応変なゼミ活動をしています。古賀先生の温かいお人柄のため、研究テーマは、ゼミ生の今までの経験や自己の興味を深化させ、文学から経済に至る内容まで多岐にわたっています。(Y)



古賀義弘先生

横山 ゼミ

● 唯識思想・仏教心理学・インド哲学

横山ゼミでは、仏教思想の根本である「唯識」(唯心だけが存在するという思想)と、「阿頼耶識」(心の深層にある根本の心、人生の全ての拠り所)について学んでいます。一番身近で捉えどころのない「心」を磨き、変革して、混迷を極める現代で勇氣と情熱をもって生きることを目標としています。ゼミのメンバーは本科生8名、専攻科生4名(男6、女6)の個性あふれる12名です。和気あいあいの雰囲気の中で意見交換をし、時には場所を変えて、修了報告書・論文の完成を目指しています。(S)



横山紘一先生

笠原 ゼミ

● 組織論

笠原ゼミは、専攻科8名本科生8名の、合わせて16名からなるゼミです。笠原先生は社会派で常に世界中の弱者の立場に立って活躍されています。ある時は中国、ある時はバングラデシュ、またある時は東北の被災地に赴き、世界中を駆け巡っています。そして、ご専門の組織論に基づき、「ゼミの授業においても、より良い組織とはどのようなものか」を常に我々にレクチャーしてください。先生の口癖は、「教養とは、知識を積み重ねるだけではなく、自分の中にもう一人の自分を見つめる眼をもつことである」ということです。(K)



笠原清志先生

橋本 ゼミ

● 高齢者福祉・施設ケア・介護保険

橋本ゼミの構成人員は本科生4名、専攻科生4名の8名です。また、立教コミュニティ福祉学部福祉実習教室の荻野起与子さんが、いろいろと助言してくださいます。



橋本正明先生

橋本ゼミ前期は、立川至誠ホームでの体験学習。講読会で『変わる家族と介護』(春日キスヨ著)『今から考える終の棲家』(大沢久子著)の2冊を学習しました。更に、報告書、論文の研究テーマを発表し合いました。

各自が課題、問題意識を持って、高齢化社会をどう生きるかを模索しているゼミです。(G)

庄司 ゼミ

● 家族論・ジェンダー論・福祉政策論

庄司ゼミのメンバーは、本科生11名、専攻科生5名計16名の構成です。庄司先生の専門が家族論・ジェンダー論であるからか、圧倒的に女性が多いのも特色です（男性は本科生2名）。



庄司洋子先生

修了報告書・論文作成に向け、毎回3～4名が各自のテーマを提出し、全員で意見を出し合い議論を行っています。先生の専門分野のほか、米国留学や家庭生活の経験などからの貴重なアドバイスと、先生のゆったりとした包み込むような雰囲気の中で、楽しく学んでいます。ゼミ終了後、ワインを傾けながらの語らいは、何よりも貴重な楽しい時間でもあります。(O)

上田 ゼミ

● 動物生態学・動物行動学・環境保全学

本科11名専攻科3名（男女同数）です。上田先生のご専門が動物生態学特に鳥類のため通称鳥ゼミです。ゼミの進行はゼミ生が語り合う中で決めています。鳥に限らず広く生物や自然環境がテーマですが、それだけ



上田恵介先生

でなく「今なぜ学ぶか」「学びの中で今後の生き方にどのようなヒントを得たか」などについてもゼミ生がそれぞれ意見や思いを述べています。上田先生は静かにゼミの進行を見守りながらさりげなくアドバイスをしてくださいます。ゼミ終了後恒例となっている二次会に加え、休み中に懇親会もある楽しいゼミです。(N)

鈴木 ゼミ

● 環境人類学・文化遺産の科学

鈴木先生は東大大学院博士課程修了の理学博士で名誉教授。専門は「人類年代学」「原子力ルネッサンス論」「イースター島環境学」と難しそうで女性は敬遠しがち…でも、「今深刻な問題の原発事故と、そろそろイースター島に行きたいという」ガイダンスでの先生のお話に



鈴木正男先生

惹きつけられて、行動派の女性6名、知性派の男性7名が集まりました（男女各1名専攻科生を含む）。「原子力研究所やイースター島」について映像を見ながら楽しく学んでいます。又、親睦会も定例会の他、毎週自由参加の会があり、明るく楽しいゼミです。(M)

坪野谷 ゼミ

● 生きた経済と金融論

本科（男4、女3）、専攻科（男5、女4）16名の陣容です。先生が作られる毎回の資料（授業もゼミも）は我々がこれから如何に生きるべきかのヒント満載です。ゼミの時間には、その日の新聞の経済社会問題等を話題



坪野谷雅之先生

にゼミが展開されて、夜8時に終了するのが惜しい程の濃密な内容です。この春休みと夏休みには、先生とゼミ生同士でE-mailによる「The virtual seminar by Tsubonoya」を開講する等大変活気のあるゼミです。(K)

木下 ゼミ

● 社会老年学・ライフとケアの社会学・質的研究法

本科8名、専攻科4名、男女半々の構成です。前期は、木下先生の著書『質的研究と記述の厚み』という、表紙の固い、ぶ厚く、重い本に取り組みました。頭の中は？マークが飛び交い、その難しさで一気に学生気分へ



木下康仁先生

引き戻されました。先生の一言一言は深く示唆に富んでおり、個性豊かなゼミ生はどうやって口数の少ない先生からお話を引っ張り出そうかと、毎回あの手この手で迫っています。外見は穏やかながら、並々ならぬ情熱とパワーを秘めた師匠にならい、地味に地道に一步步階段を登る発展途上の集まりです。(S)

渡辺 ゼミ

● アメリカ文学・詩人論

渡辺ゼミは本科生5名、専攻科生3名の構成です。渡辺先生のご専門はアメリカ文学、とりわけ英語詩ですが、このゼミでは人文学という大きな枠組みの中で、個々人が独自の研究を進めています。「ゼミ生が主役」が



渡辺信二先生

当ゼミの運営方針。哲学、文学、歴史、教育など幅広いジャンルから研究成果を発表し、意見を出し合い、修了報告書へとつなげていきます。このとき求められる姿勢は『疑問を持ち、現実に対してクリティカルに向き合うこと（渡辺先生）』。ゼミの後は先生を囲んで懇談。院生、他ゼミとの交流もあり、楽しみながら学ぶ日々です。(N)

話題の授業

全学共通カリキュラム「文学と人間」

羽矢 みずき先生

羽矢先生の授業を受けて驚くことが三つあります。第一は、受講生の多いことです。約900人の学生がタッカーホールで受講しています。第二は、先生はお若いうえに造詣が深い方です。それで受講生が多いのでしょう。第三は、先生の充実した教材研究と資料の緻密さです。毎時間、全受講生に当日の解説資料と次回の学習の作品資料を配布してくださいます。これだけ完全に準備された授業を受講できる学生は、本当に幸せです。これで勉強しなければ先生に申し訳ない気持ちになります。(G)



「生命の多様性」

上田 恵介先生

大変楽しく、知的好奇心が満たされ心が癒される授業です。天気の良い日は大学のキャンパスを散策します。夏鶯や冬鶯の巻き型の違い、全体の見かけは似ていても、すずかけの木肌はつるんとして白っぽく、百合の木は、ゴツゴツとした茶褐色であること等を学びながら…。小石川植物園や上野動物園での課外授業も意義深いものでした。木の実や鳥や蜂などのいろいろな生物が、それぞれが関わり合いながら生きていくことに感動を覚えます。今まで何気なく通り過ぎていた小道が、生命の息吹が感じられる生き生きとした小道に変わりました。(K)



「現代史の中の自分史」

内海 靖彦先生

—少数精鋭の受講生—

「これから皆さんが書く自分史とは、自分自身に向き合い、自分の歴史を語る方法を自分で見つけていくことです」と先生は最初の授業でこうおっしゃいました。毎週、自分の記憶にある幼少のころからの思い出や出来事と向き合い、年代順に書けるだけ書いて提出します。先生は書き手の気持ちに共感していただき、懇切丁寧な添削、批評をしてくださいます。受講生一人ひとりが人生と向き合って自分史を書く姿が、とても輝いて見える授業です。(G)



「日本人と英語の200年」

鳥飼 玖美子先生

先生は本年度からRSSCの授業を担当していらっしゃいます。公式に英語と接触したフェートン号事件以降の日本と英語の歴史を紐解きながら、日本人と英語の関係を考えさせてくれる授業です。先生の授業の魅力を3つ紹介します。(1) 長い間同時通訳者や英会話番組で活躍なさっていた経験をもとに、やわらかな語り口で、分かり易く講義していただき、毎回新鮮な驚きと示唆が得られること。(2) 受講生からの質問や意見に気軽に答えていただき、双方向の授業展開であること。(3) 大変若々しく、いつも笑顔が溢れていること。皆様も受講して確かめてください。(M)



「昭和史の検証」

立花 隆先生

「先端科学・技術論」に続いて受講生の多い科目です。立花先生の話を聴きまらすことなくノートを取る姿や驚きの声が発せられる時もあります。大まかな歴史の流れを取り入れながら昭和史を戦前・戦後に区別し、憲法の違いや終戦に向けての動き、沖縄に残る自然洞窟(ガマ)での住民の抵抗した姿など胸を打たれる話や興味深い話がたくさん出てきます。随所に取り上げられる様々な資料や本の紹介で、さらに自分で勉強してみようという意欲がかき立てられます。そして、自分の振り返りと共にこれからの自分の指針となる授業です。(I)



「ボランティアとコミュニティデザイン」

内海 旬子先生

内海先生は障害者団体とNGO(地雷廃絶日本キャンペーン)に携わっていらっしゃいます。授業は主に障害者支援に関わる制度や歴史、ボランティア、行政、運動などについてディスカッションを交えながら行っています。障害者の方から直接話を聞く機会があり、盲ろう者からは震災に遭遇した時、どのように接してあげたら良いのかなど通訳を通して学ぶことができました。車いすで生活している方からは、道路や駅のバリアフリーがとても大切なことを学びました。すべての人が普通に生活できる社会を実現するために必要なことを探求する授業です。(I)



修了生の近況

立教セカンドステージ大学（RSSC）も3年が経過し、本科を修了した修了生が増えつつあります。修了生の近況を紹介します。

木村静枝さん 1期生

月に一度の「一期生会」「読書会」への参加、一部の方との勉強会などを続けています。そこでは尽きることのない新しい発見があります。それもRSSCでの「学び」の機会が、そして机を共にした人たちとの出会いがその発端です。これらは、私にとっての「宝の泉」です。人間の脳は「学び」にこそその本質がある、と同時に人間の本性でもある「遊び」にも通ずることを実感しつつ、至福の日々を過ごしています。常より課題の一つ、同じキャンパスに集う若い学生さんたちとの交流の実現を模索中です。RSSCの開学に限りない敬意と感謝を捧げてやみません。



高橋庸子さん 2期生（立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科）

3.11を経て、今なお学ぶ環境に身を置いていることに感謝しています。セカンドステージ大学に於ける、さまざまな経験を積んだ仲間との出会いは、教師一筋に生きてきた私にとって、社会デビューとなりました。大学院に入学した頃すれ違う皆さんの笑顔が眩しく、選択の失敗を悔いしましたが、それを解決してくれたのは、大学院の授業の力でした。幅広い年齢層・職業の学生と交わす討論形式の授業は、難解ですが魅力的です。「庄司ゼミは永遠なり」を合言葉に、時間を重ねて行きたいと思います。



神山 利さん 3期生（11年度専攻科）

本科を今年3月に修了、「学び」の時も2年目を迎えました。今は専攻科で学んでいます。セカンドステージ大学の最大の特徴は「ゼミ」があることでしょうか。もう一つ大きな特色があります。学部学生と一緒に「全カリ科目」を受講できることです。私もいくつか受講しています。試験やレポート提出で大変な面もありますが、とても刺激を受けています。チャペルからパイプオルガンの演奏も聞こえてきます。このままこの学び舎に留まって、学びの時を続けたいとの贅沢な思いにかられる今日この頃です。



牛場行典さん 3期生（11年度専攻科）

「学びの情熱尽きることなく」私は立教セカンドステージ大学のこのスローガンが大好きです。学びをベースとした「出会い」と「仲間」が素晴らしいと思います。現在、専攻科で学んでいます。このRSSCは本科が中心だと思います。専攻科となるとモチベーションが半減します。それ位、本科の時の「感動」が大きいのです。だからと言って専攻科進学を否定しているのではありません。長い？人生の中で、2年間ぐらい、新たな自分探し・学び直すことも価値あることです。時間的経済的余裕があれば、ぜひ専攻科進学をお勧めします。



尾崎 忠さん 3期生（11年度専攻科）

早いもので入学して2年目になった。半世紀に及ぶサラリーマン生活を終え、「就業規則からの自由」を得た私にとって、大学は単に学びの場だけでなく、自己実現の場、「居場所」、第2書斎である。無職になり年金生活者となったからには、自己を社会化する上で大学に通うだけでも値打ちがある。だから私は授業のない日も通学し、ラウンジ、図書館、メディアセンター、学生食堂等利用しまくっている。去年はアルバム委員、今年は同窓会役員に加えて、研究会同好会に3つも入って、ゼミ後飲み会も目下皆勤中。幸せな「アラ古希」である。



桑原照子さん 3期生（11年度専攻科）

本科生の1年間は、志を同じくする仲間との交流、新しい「学び」への挑戦であつという間に過ぎていった。私は専攻科に進学して「学び」の場を広げた。木曜日と金曜日はRSSCでの「学び」に集中する。他の曜日は、地元での「学び」を開始した。一つは水曜日の「外国人の日本語教室」での支援、二つ目は不定期だが地元の小学校10校近くへの教員研修支援である。RSSCに入学して他者に深く共感することを学んだ。今の私にはどれもが「学び」の場、その準備や見届けに必死になる緊張感が快い。



サポートセンター活動

在校生や修了生の社会との関わり合いや社会貢献活動を支援するため、大学がサポートセンターを設置しています。そこで現在活動中の9サポートセンターの活動状況を順次紹介していきます。

かがやきライフ研究会



研究会発足のきっかけは、RSS C一期生の広報委員がニューズレター第1号、第2号を発行し終わり、本科修了間際に、誰からともなく出た次の言葉でした。

「折角楽しく1年間を過ごし気の合う仲間ができたのだから、このまま解散するのは惜しいね」「今までの経験を少しでも社会に情報発信できるといいね」

この言葉が発端となり、皆で「かがやきライフ研究会」を立ち上げました。研究会の目的は、人生のセカンドステージの生き方のヒントとなる記事を掲載した「すずかけの小径」(有料小冊子)を発行することです。2009年に創刊号、2010年に第2号と毎年立て続けに発行し、現在第3号の編集に取り組み中です。研究会を構成する会員の年齢の性格上、次第に会員数が減っていくことが現在の悩みです。しかし、出来る限り小冊子の発行を続けたいので、志のある2期生、3期生、4期生のご参加をお待ちしています。(I)

ウクレレ合唱団鈴懸



当団設立の目的は、ウクレレ演奏と合唱の音楽活動を通じて団員の交流と親睦を図り、また介護施設を訪問して音楽で介護支援を行うことにあります。2010年4月に発足し、月2回水曜日の夕刻約2時間、受講生ラウンジで練習をしています。また、半期に一度は新座の太刀川記念交流会館にてレベルアップのための合宿練習を行っています。今年度の前期合宿は7月27日～28日に行いました。後期は来年1月25日～26日の予定です。演奏曲目は文科省推薦の100曲を中心に唱歌やポピュラーな歌謡曲ですが、訪問演奏した施設では好評です。現在団員は35名ですが、仕事の都合、遠距離、家族の介護など団員それぞれの事情があり、全員が一堂に会することが難しい状況です。そのような状況下でも、練習の成果とPRの効果でしょうか、介護施設からの演奏依頼が入り始めています。皆さんのお近くの施設へも訪問しますので、是非お声を掛けてください。(I)

フィールドワークetc.

立教セカンドステージ大学の授業の中には、個人ではなかなか体験できない、教室の外へ飛び出して体験する授業があります。今年の本科学生の中には、この授業を目当てに入学した人もいます。

◆坪野谷先生の「暮らしに役立つ経済と金融」



東京証券取引所

セカンドステージを賢く生きるために、身近な経済と金融の現象―実体―本質を分かりやすく理解することなどを目標にしています。その一環で、次の課外活動を行っています。



日本銀行

「東京証券取引所」を見学し、株価は経済と金融との現象であることを理解した後、兜町周辺の散策を行い、受講生の中には投資家の命がけの戦いの歴史を感じとった人もいました。

経済と金融との心臓である「日本銀行」を見学し、金融は経済の動脈であることを理解しました。

特に、受講生が驚いたのは、日本銀行の旧館の歴史の重さ、旧金庫室の大きさ、歴代の日本銀行の総裁の肖像画、重厚な作りの旧総裁室などです。写真撮影が禁止なため、写真により臨場感をお伝えできないことが残念です。機会がありましたら見学されてはいかがでしょうか。(Y)

◆橋本先生の「楽しい体験学習」



ボランティア体験

6月4日、橋本ゼミでは社会福祉法人至誠学舎立川至誠ホームで体験学習を行いました。当日は「開設60周年記念 至誠ホームまつり」で、ゼミ生全員がフィールドワークに参加しました。初めに担当者から、活動にあたっての諸注意、車椅子介助者の心構え等を学びました。続いて、車椅子の扱い方の実地指導も受けました。

至誠ホーム長でもいらっしゃる橋本先生の信念「楽しくなければボランティアでない」が全職員に浸透していて、私たちにとっても、楽しい体験学習でした。(G)

編集後記

今年は、東日本大震災により4月の入学式が無く、5月の連休明けよりの授業開始。早くも前期が終了し、各受講生はそれぞれに自分のリズムでキャンパスライフを作りつつある様子。

毎日通学して図書館を利用し受講する人、また週2回で他の日は仕事や中には親の介護等をしている人、それぞれが自分のキャンパスライフを組み立てられるのが立教セカンドステージ大学だ。

そこには、先生方、先輩を含めたサポートや声には出さない受講生同士の連帯が感じられる。(T)

ニューズレターNo.7編集委員(五十音順)

【本科】

栗田彰、石原和子、上田明子、新澤直子、多賀谷雅文、田島教雄、中嶋廣士、中畠和子、宮下由紀子、柳生将人

【専攻科】

後藤 修